

日本の「安心」はなぜ、消えたのか

山岸俊男

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

「心がけ」では

何も変わらない！

日本人の心は荒廃したか？

ここ数年、「日本社会のモラルの崩壊」あるいは「日本人の心の荒廃」といったテーマがマスコミや政治の世界、あるいは教育の世界でさかんに論じられています。

品質を偽装し、消費者を平気で騙す企業が続々と明らかになるのも、あるいは社会の決まりを守らない若者たちがいるのも、そして同級生をいじめる子どもたちがいるのもすべて、日本人の心が荒廃し、日本全体のモラルが低下しているからではないかというわけです。

たしかに、ここ数年のマスコミ報道を見れば、日本社会が「悪い方向」に向かっているのではないかと不安に駆られるのは無理もないことです。

経済界を見れば、企業モラルが問われるスキャンダルが次々と明らかになっていきます。最近筆者が住む北海道でも、食品業者による牛肉偽装事件が起き、それに続く形で今度は、有名菓子メーカーの賞味期限偽装が発覚しています。また、ライブドア事件ではインサイダー取引までを行なう「なりふりかまわぬ利益追求の姿」に批判が集まりました。

こうした事件の続発に対して「古きよき日本の商道德」が失われてしまったと感じる人は少なくないようです。すなわち「アメリカ流のハゲタカ資本主義が日本の経済界を墮落させてしまった。顧客を騙してでも儲けようという企業が現われるのは、その表われた」というわけです。

また、最近の若者に対して、マユをひそめる大人たちが増えているのも事実です。

いじめの横行、フリーターの増加、公共道徳を守らぬ、自分勝手に傍若無人ほうじやくぶじんな振る舞い——こうした若者たちを見て、大人は「戦後の教育がよくなかった」と溜め息をつきます。「ゆとり」や「人権」を尊重しすぎて、我々は子どもを甘やかしすぎたのではないか、というわけです。

経済界の問題にしても、子どもたちの問題にしても、そこで問われているのは「日本人の心」です。

つまり、今の日本がさまざまな問題を抱えているのは、すべて「日本人の心の荒廃」「モラルの低下」が原因であって、そこをどうにかしないかぎり、どうにもならないというわけです。かつての日本人が持っていた「品格」を取り戻そうという本がベストセラーになり、武士道の見直しや道徳教育の復活が叫ばれているというのも、その流れの中で起きていると言えるでしょう。

かつての日本人は清く正しかったのか

筆者は北海道大学の大学院で、「信頼」や「安心」といったテーマで社会心理学の研究をやっている関係で、このところマスコミから「日本人の心の問題」についてコメントを求められたり、取材を受けたたりすることが少なくありません。また、「日本社会における信頼の回復」といったテーマで講演をしてほしいという依頼が舞い込んでくることもしょっちゅうです。

しかし、そこで私はかならずこう聞くことにしています。

「日本人の心は荒廃したとおっしゃいますが、もしそうだとするならば、「かつての日本人の心は清く美しかった」ということになります。それは本当なんでしょうか」

こんなことを言われると、たいていの人は驚いて、口ごもってしまいます。

「……そりゃ、今よりは昔の日本人のほうが立派だったんじゃないでしょうかね」

「本当にそうでしょうか？ たとえばいじめの問題にしても戦前の日本陸軍には新兵いじめという、陰湿で理不尽なリンチの伝統がありました。軍隊はそれを黙認するどころか、奨励さえしていたじゃないですか。また、戦時中に疎開先でいじめに遭ったという話はよく聞きます。さらに言えば、農村では『火事と葬式以外は付き合わない』という村八分むらばちぶが行なわれていたそうです。これなんかは、組織のないじめではないですか？ それでも昔の日本人のほうが立派だったとおっしゃいますか」

「うーん、でも、マンションの耐震強度を偽装したり、牛肉のミンチと言いながら豚肉を混ぜて

売るような悪質な企業は昔はなかったでしょう」

「はたしてそうでしょうか？ 高度成長期には住民の健康に害があると知りつつ、有害な廃棄物やガスをまきちらして公害病患者をたくさん作った企業がいくつもありました。もつと歴史を遡さかのぼれば、明治時代には足尾鉍毒事件で多くの村が汚染されました。そのほうがもつと悪質とは言わないのですか？」

「それでも昔の日本人のほうが勤勉で、真面目でしたよ。それに比べて今の若者と来たら、根性もなければ勤勉の精神もない。困ったものです」

「でも、昔は一生懸命働かなければ食えなかったから、しょうがなく働いていたという部分もあるでしょう。仕事が好きな人ばかりじゃないですよ。その点、今はフリーターでも何とか食っていけるわけで、昔よりもずつといい時代になったという考え方もありますよ」

「……（無言）」

「昔はよかった」式批評のおかしさ

古代エジプトだか古代メソポタミアだかの遺跡の出土品に書かれていた文字を解読してみたから、「近頃の若い者は……」ということが書かれていたという話を聞いたことがあります。この話がはたして本当なのかどうかは知りませんが、人間に「昔はよかった」と過去を美化して考える傾向があるのは事実でしょう。

人間が過去を美化しやすい理由はいろいろあるでしょう。

過ぎ去った時代は二度と戻ってこないものですから、美しく見えてしまうのは当然のことでもあるし、また、多くの人にとつての「昔」とは、若い時代に自分の身の回りで直接に見聞きしたことが基本になっています。「私の子どものころは、そんなことはなかった」というわけで、つまり子ども時分の見聞なのですから、そう大した事件などあるはずもありません。それに対して、「今どき」というのは、大人になってからマスコミなどを通じて知識を得ているので、極端なケースや大事件をいっぱい知っています。

つまり、昔と今とでは情報源がまったく違うわけなのですから、「昔はよかった」という話になつてしまうのは当然のことなのです。いずれにせよ、それらは単なる印象批評で、ちゃんとした根拠があるというわけではありません。

ところが、今の日本で語られている「社会問題」なるものの多くが「昔はよかった」式の話ばかりで、きちんとした客観的データに基づいた議論があまりにも少ないのには困つてしまいます。しかも、それが政治の世界でも堂々とまかり通つているのですから恐れ入つてしまいます。

断わつておきますが、私は何も「日本人の心は昔から汚かった」などと言うつもりは毛頭ありません。そもそも、たとえば「A国の人の心は、B国の人の心よりきれいだ」などといった具合に、人間の心を比較し、優劣をつけること自体がナンセンスな話で、一歩間違えれば、ナチスなどの人種差別主義につながりかねない危険な考え方と言えます。

そんなことより私が言いたいのは、「何でも心のせいにするのは止めてくれ」ということなのです。

心理学の一分野である社会心理学を研究している私が、こんなことを言うと奇異に思われるかもしれませんが。しかし心理学を研究しているからこそ、世の中の出来事をすぐに「心」に結びつけて語りたがる今の日本の風潮は非科学的なものに見えてしかたがないのです。

精神論は思考停止と何ら変わらない

何か事件が起きたとき、それを当事者の「心」がもたらしたものと片付けるのは簡単なことです。

「消費者を欺くあざむような悪いことをするのは、企業家としてのモラルが低いからだ」

「いじめをする子どもが増えているのは、子どもたちの心が荒れているからだ」

「ちよつとしたことで会社を辞める若者たちは、子ども時代の親のしつけに問題があるのだ」
たしかに、こうした問題の根底に「人間の心」が関係しているのは否定しません。

しかし、だからといって、それを当事者の意識が足りないからだとか、根性がよくないからだとか、各人の心にすべての原因を押しつけてしまうだけでいいのでしょうか。本当の原因はもつと別のところにあるのかもしれないのに、その検討をろくにしないでそれぞれの人間の「心構え」に責任を求めてしまうのでは、思考停止と批判されてもしょうがないと思うのです。

今の日本が大きな時代の転換点にさしかかって、さまざまな問題を抱えているのは事実です。これまで日本人が共有していたさまざまな価値観が揺らぎはじめ、社会としての一体感が失われているのは否定できないことでしょう。また、未来へのビジョンが見えにくい時代になり、誰もが将来に対する不安を抱いているのも間違いありません。

だが、そうしたさまざまな問題に対処するに当たって、いきなり「心がけがよくない」とか「心が構えが悪い」というお説教をしてしまうのでは、そこで議論が終わりになってしまつて、本当の解決に結びつかなくなつてしまいます。

それは戦前の日本の軍人たちが、あらゆる問題を精神論で片付けようとしていたのとまったく同じことです。

戦争において本当に大事なものは戦略であり、戦術であり、武器であり、兵站へいたんであるはずなのに、負けたのは兵士に「必勝の精神」が足りないからだと言つてしまえば、それですべての議論が終つてしまいます。負けたのは何が原因で、誰の責任なのかをきちんと追求すべきなのに、すべてが「心のあり方」に責任転嫁されてしまう——これでは問題の解決も目的の達成もできるはずがありません。

歴史が証明した「心の教育」の無意味さ

いや、さらにもつと過激ラジカルなことを言わせてもらえらば、そもそも「心がけをよくしなさい」

というお説教くらいで、人間の行ないは改まるものなのでしょうか。正直に言えば、私はこれについて否定的な考え方をしています。

ご承知のとおり、今の日本では教育論議がさかに行なわれていますが、そこで重要なテーマになっている一つが「心の教育」です。つまり、子どもたちに幼いころから倫理教育、道徳教育を施して「美しい国」を作ろうという話なのですが、私はこうした議論を聞くたびに溜め息をいつしてしまうのです。

なぜかといえば、いくら国民に徹底した倫理教育を施したところで、「いい国」「美しい社会」など生まれえないということは歴史が証明しているからです。なぜ教育改革論者たちは、こうした歴史の教訓に対して無関心なのでしょう。私はそれが理解できないのです。

二〇世紀において国民に対する倫理教育・道徳教育に最も熱心だったのはソ連や中国といった社会主義国家でした。

マルクスは、資本主義体制が崩壊して社会主義、共産主義の世の中がやって来たあかつきには、人間の心の中にある「悪しき利己心」は自然に消えてなくなると考えていたようです。人間の利己心は資本主義という社会構造がもたらしたものであって、社会構造が変われば人の心も自ずから変わっていくと考えていたのです。

ところが、実際に社会主義体制になっても、なかなか人間の心から「資本主義時代の利己心」が消えてなくなりません。そこで業を煮やした社会主義国の支配者たちは徹底したイデオロギー

教育を国民に施すことで、人々に利他の精神、奉仕の精神を植え付けようとなりました。

しかし、その結果はどうだったでしょうか。

皮肉なことに、ソ連や中国などの社会主義国家では他人に奉仕する立派な国民が生まれるどころか、それとは逆のことが起きてしまったのでした。

「大釜の飯」を追放できなかった共産中国

改革開放前の中国でよく使われた表現に「大釜おおがまの飯」「鉄腕てつわんの飯」という言葉がありました。

ご承知のとおり、かつての中国では農業も工業も、すべての産業が国有化されていて、そこで働いている国民たちはいわば公務員のような立場にありました。

そうした環境に置かれると、人間は誰だって真面目に仕事をしようとしません。なぜならば、どんなに頑張つて働いたからといって収入が上がるわけでもないし、逆にいくら怠なまけていても食いはぐれることもないからです。

国家が「大釜」あるいは「鉄腕」の飯、つまり収入を保証してくれているのですから、真面目に働くだけ損をするというわけです。

日本でもかつての国鉄や郵便局に対して「親方日の丸」といった批判が言われていたのですが、中国の場合、「大釜の飯」「鉄腕の飯」という精神が国中にはびこつて、それが中国経済の停滞をもたらす最大の原因になっていたのです。

それと同様のことは旧ソ連でも起きていたわけですが、中国もソ連もこうした国民たちの「怠け心」を教育によって徹底的に矯正しようとはしました。そればかりか、働かない人間に対しては嚴罰を下し、「強制収容所に入れるぞ」と脅かすことで、国民に勤勉の精神、奉仕の精神を植え付けようとしたのでした。

しかし、そうした方法をいくら行なっても、中国でも旧ソ連でも事態を改善することはできず、ソ連に至ってはついに国家ごと滅びてしまったことは今さら言うまでもないでしょう。

タブラ・ラサの神話

さて、この中国の例が私たちに教えているのは、「人間の心は教育によって、いかようにも作り変えることができる」という考えがまったくの誤りであったという事実です。

教育が、人間が文化的な生活を送っていくうえで必要不可欠なものではあることは事実です。しかしながら、教育で知識を教え込むことは可能でも、人間性に反した形に心を作り変えることはできない。教育は万能ではないのです。そのことを中国や旧ソ連の例は教えてくれています。

二〇世紀の社会科学における、最大の誤りの一つは「タブラ・ラサの神話」を信じたことになりました。

タブラ・ラサとはラテン語で「白板」のこと。

つまり、生まれたての赤ちゃんの心は何も書き込みのないホワイトボードのようなものであつ

て、そこに適切な教育を与えることで「立派な人間」が作れるはずである——今の言葉で言えば、赤ちゃんの脳みそは初期化されたコンピュータのようなもので、そこに適切な教育によってプログラムを組み込めば、思いどおりの理想的な人間ができると考えたのが「タブラ・ラサ」の考え方です。

中国や旧ソ連といった国々が、何の見返りがなくとも同胞に奉仕するような立派な人民をイデオロギー教育によって作り出せると信じたのも、結局はこの「タブラ・ラサの神話」と同じ発想が根底にあつたからに他なりません。

しかし、そうした教育はついに成功することはなく、ソ連は消滅し、中国もまた大きな方向転換をせざるをえなくなりました。

その理由は今さら言うまでもないでしょう。人間の心はけっしてホワイトボードなどではなかつたというわけです。

考えてみれば、それは当然すぎるほど当然のことです。

私たちの身体のすべての部分は、脳も含めて生命進化の中で作られてきたものです。人間に指が五本あるのも、目が二つあるのも、それが私たちの生存にとって必要であつたからに他なりません。

つまり、これは目にも手にも、それぞれの役割や働きが生まれながらに与えられているということでもあります。目で音を聞くことはできないし、手で息を吸うことはできない。これは当然

のことです。

だとしたら、人間の脳だけが例外であるはずがありません。脳の働きや役割もまた生命進化の中で作り出されたものであって、それを人間の都合で勝手に変えることはできないというわけです。

そもそも私たち人間が生きていけるのは、進化の長い歴史の中で獲得された「生きるためのプログラム」が脳の中に組み込まれているからに他なりません。考えてもみてください。もし、人間の脳が最初は白紙状態であったとするならば、厳しい自然環境の中で人類は生き延びていけたでしょうか？ もちろん、そんなはずはありません。

「人間性」を無視した教育をやるうとした社会主義国

こうして論理的・科学的に考えていけば、人間の心が「タブラ・ラサ」であるわけもないことは誰の目にも明らかというものです。

実際、近年の脳神経科学や認知科学の進展は、人間の心に最初から組み込まれた「プログラム」こそが、いわゆる「人間性」の根本になっていることを次々に明らかにしています。

しかしながら、二〇世紀の社会科学はこうした自然科学的なアプローチを軽視して、イデオロギーで人間を考えるという大きな失敗をしてしまいました。その象徴が、旧ソ連や中国といった社会主義諸国のイデオロギー教育であったと言えます。

結局のところ、こうした社会主義の国々が失敗したのは、人間の心に最初から組み込まれている「人間性」を無視した教育を行なおうとしたことにありました。

マザー・テレサのような、ごく一部の例外は別として、何の見返りもないのに他人のために働くといった人間性は、残念ながら私たちの心の中にはないのです。だからこそ、どれだけイデオロギー教育を施しても、人間の心に純然たる博愛精神を植え付けることはできなかったというわけです。

社会問題を解決するには、まず人間性の研究から

しかし、こう書いていくと、読者の中には次のようなことを感じる方がきつとおられるはずで
す。

すなわち「人間の心には、あらかじめプログラムが仕込まれているというのなら、教育も社会改革といった努力も意味がないということにならないか？」という反論です。

たしかに、私たちの人間性の本質がすでに進化の流れの中で決まっているのであれば、人間が何をやっても意味がない——そう悲観的に考えるのは無理もないことです。しかしながら、私はそう思いません。

なぜならば、心の中にある「人間性」の本質が分かれば分かるほど、その性質をうまく利用することによって社会の中にあるさまざまな問題を解決することが可能になると思うからです。

「人間性」をうまく利用することで、社会問題が解決できる——そのことを端的に示しているのが先ほどの中国の例です。

すべてが国营企業で行なわれていた時代の中国の人たちは、「大釜の飯」「鉄腕の飯」でちっとも勤勉に働くとはしませんでした。その理由は先ほども述べたとおり、何の見返りもない環境で他人のために奉仕をするという心は、私たちの「人間性」の中になかったからです。

ところが、このような中国で資本主義原理が導入され、「改革開放政策」が行なわれるようになったら、何が起きたでしょうか？

その答えは言うまでもないでしょう。

今まではどんなに政府が旗振りをして働かなかった人たちが、目の色を変えて働くようになったのでした。

もちろん、中国の人たちが一生懸命に働くようになったのは、資本主義によって奉仕の精神に目覚めたせいではありません。国营企業時代は「働かなくても食っていける」社会だったのが、今度は「働けばもつといい生活ができる」社会になったからで、自分や自分の家族のために猛烈に働くようになったにすぎません。

しかし、どんなにイデオロギー教育を行ない、怠け者に厳罰を与えても、いつこうに解消されなかつた中国経済の非効率さが、これによって解消されたことは誰にも否定できない現実です。

人間が進化の過程を通して身に付けてきた「人間性」を修正しようと無駄な努力を重ねるより

も、それを事実として受け止めたうえで、その人間性を上手に活用することで社会の問題を解決していったほうが、ずっと建設的ではないかと思うのです。

「心の教育」では問題は解決しない

さて、話が長くなつてしまいました。では二一世紀の今日、私たちは「タブラ・ラサの神話」から卒業できているでしょうか？

残念ながら、それは違うようです。

そのことは現代の日本を見渡すだけでも明らかです。

日本の社会で起きているさまざまな事件や問題について、その原因を「心」に求め、きちんと子どもたちに教育をしさえすれば事態は改善すると思つている人が、どんなに多いことか。私はこの現状を見るたびに、溜め息をついてしまいます。

すでに世の中は二一世紀。ソ連も滅び、中国も社会主義を事実上、返上したというのに、いまだに戦前の軍部や社会主義諸国の指導者たちと同じ精神論を振りかざして、「心がけ」で問題を解決しようとする人が多いことには怒りを通り越してあぜん啞然としてしまうほどです。

それは、たとえば「いじめ問題」についても言えます。

今の日本で行なわれている、いじめ論議の多くは、家庭や学校の教育を通じて「いじめをしない子ども」を育てようといった話だったり、あるいはもつと教師が子どもたちに対する監視を強

めることで、いじめを減らしていこうという対策だったりするわけですが、はたしてこうしたやり方で「いじめ問題」を解消することはできるでしょうか。

私の答えは、残念ながら「ノー」です。そんな発想でいるかぎり、今の日本が抱えている「いじめ問題」は解決できるはずもないし、かえって問題をこじらせる危険性だってあるというのが筆者の考えなのです。

いじめのない国なんて作れるはずがない

先ほども書きましたが、そもそもしじめという現象自体は何も今に始まったことではありません。戦前の日本にもいじめはあったし、日本以外の国でもいじめは起きています。

アメリカでもイギリスでも、中国でもインドでも、どんな国の学校にも「いじめっ子」はいるし、「いじめられっ子」もいるのです。そのことは子どもたちの世界を扱った外国の映画や小説、たとえば『ハリー・ポッター』シリーズなどを見たりするだけでもすぐに確認できる話です。

つまり、いじめは現代日本だけに限った現象ではなく、人類共通の現象であるということですが、それは言い方を換えるならば、私たちの心の中には残念ながら「他人をいじめろ」という人間性がどうやら潜^{ひそ}んでいらしいということでもあります（実は、私は「いじめをする心」にはマイナスの側面だけでなく、プラスの側面もあると考えているのですが、そのことについては後述します）。

ところが、今の日本では「心の教育」をすれば、いじめをしない子どもができるという前提で議論が進んでいます。ここに私は、今の日本のおかしさが潜んでいると思うのです。

改めて言うまでもなく、「いじめをする心」を教育によって修正することができるといふ発想は、旧ソ連や中国で行なわれた「イデオロギー教育」と何ら変わることはありません。

事実、古今東西、ありとあらゆる国家や社会の中で、「いじめ」を完璧に追放した社会があったという話を一例も私は知りません。教育で「いじめの心」をなくせると言う人たちに、この点についてどのように考えているのか、ぜひお聞きしたいところです。

結論を先に書いてしまえば、いじめをなくそうとするのは、まるで砂上さじょうに楼閣ろうかくを建てるようなものだと言っても過言ではないと私は考えているのです。

これがいじめ解決の「最終兵器」!?

いや、砂上に楼閣を建てる、というのはちよつと言い過ぎかもしれません。なぜならば、教育以外の方法にまで話を広げれば、いじめを根絶する「妙策」がないわけではないからです。

いじめをなくす最も確実な方法は、親や教師が子どもたちを徹底的に監視し、彼らの行動をコントロールしてしまふことです。

先ほども述べたように、どんな子どもにも「いじめをする因子」があるわけですから、たとえ気の優しそうな子であっても油断はできない。大人たちが優等生だと思っている子どもが、

とんでもないいじめっ子だったという話は、充分ありえることです。

ですから、いじめの発生を抑止するには、ありとあらゆる子どもの行動をつねに監視することが必要です。

そこで、カネに糸目をつけず、学校のありとあらゆるところに監視カメラと盗聴器を付け、それで朝から夕方まで専任の監視員が、子どもたちの動きをマンツーマンで見張りする。さらに学校が終わったら寄り道をさせず、まっすぐ自宅に帰宅させ、親の監視下に置く。当然ながら、放課後、友だちとの自由な接触は禁止です。

しかし、それでも目の届かないところがかならず出てくるはずですから、「いじめ密告奨励制度」を作ることも大事です。

つまり、クラスメートがいじめをしているという情報を先生に伝えると、奨励金が与えられたり、あるいは内申書の点数がよくなるようなシステムを作る——このくらい徹底したことをやれば、いじめはかなり抑制できるはずですよ。

いや、「かなり抑制できる」というのではまだ不安が残る、根本的な対策が必要だということであれば、もっといい方法があります。

そもそもいじめが起きるのは、子どもたちが一カ所に集まって集団行動をすることにあるわけですから、学校教育を廃止すればいいのです。

つまり、大人になるまでは家庭の中で教育を与える。他の子どもたちとの集団行動は禁止す

る。いじめが起きる環境そのものをなくせば、間違いないいじめはなくなるわけですから、これが究極のいじめ対策になるはずです。

行為は禁止できても、心の働きは禁止できない

言うまでもないことですが、今、私が述べたような「対策」はまったくの暴論であり、現実性に欠けたものです。

そもそも子どもたちを完璧に監視するなど、そのための費用や手間を考えただけで実現不可能だし、いじめ対策とはいえ、友だちを平気で密告するような子どもに育てることが倫理的に正しいかといえ、大いに疑問です。かりにそれでいじめがなくなつたとして、そのために自由のない監視社会ができるのであれば、本末転倒に他なりません。

学校を廃止して、大人になるまで集団生活をさせないというのに至っては論外です。

しかし、いじめという行為をなくそうとすれば、ここまで徹底したことをしなければ、まず不可能だし、しかも、それが成功したとしても、それではたして本当に「いじめ」がなくなつたと言えるかは大いに疑問です。

なぜならば、それでたしかに「いじめ」という行為は押さえ込めるかもしれませんが、しかし、いじめをするという、私たちの中にある「人間性」はそれでは少しも変わっていないからです。

結局のところ、中国やソ連の政府が同志愛に満ちた人民を作れなかつたように、どのような教

育や制度を作ったところでも、いじめをする心は変えることができない。それが現実であるので
す。

「いじめ」を定義する

ここでちょっと、世の中から「いじめ」がまったくなくなったら何が起ころかを考えてみましょう。

一言で「いじめ」と言っても、その中にはいろいろなケースが含まれています。

まず、そもそも「いじめ」などという曖昧な言葉で呼ぶのではなく、れっきとした犯罪である「恐喝」「暴行」と呼んだほうがいいケースがあります。不良のグループが暴力で脅して金を持ってこさせるような場合です。自殺にまで至るようなケースでは、特定の生徒がしつこく脅され、どうしたらいいか分からなくなってしまうたという場合が多いように思われます。

私にはなぜこのようなケースを「いじめ」と呼ぶのか理解できません。世間一般ではれっきとした犯罪として認められているケースが、犯罪者と被害者が学校の生徒であると、「いじめ」という曖昧な言葉で呼ばれることになってしまふのは、事実を隠蔽していることにならないでしょうか？

さて、それとはもう一方の極にあるのが、いわゆる「しかと」にあたるケースです。つまり、特定のクラスメートを仲間はずれにしたり、あるいは無視したりする——何らかの（大人から見

れば)些細な理由によって、まわりのみんなが口をきいてくれなくなるというケースです。こうした行為は、被害者の心を傷つけるものではありませんが、それが犯罪かといえば、そうとは言えません。また「しかと」だけではなく、悪口を言われるとか持ち物を捨てられるとかいった形で、もつと積極的な意地悪をされることも多くありますが、これも犯罪に含まれるかどうかは微妙なところです。

私はこの二つを同じ「いじめ」という言葉で呼ぶことには反対です。その原因も、被害の内容もまったく違っていているからです。恐喝や暴力は犯罪として扱われるべきであって、「いじめ」などという曖昧な言葉で呼ぶべきではありません。

犯罪としての恐喝や暴力行為が学校から、あるいは世の中からなくなっても、世の中が暮らしやすい場所になるだけで、それ以外に何の不都合もおこらないでしょう。

秩序形成としての「排除」

しかし「しかと」の場合は、これと少し違うような気がします。

意地悪をとまなう「しかと」を、ここでは仲間からの「排除」という言葉で、もう少し一般化して呼ぶことにしましょう。

このような「排除」が恐喝や暴力行為と違うのは、実は「排除」を上からの権力に頼らないで、自分たちで自発的に集団や社会を維持していくために欠かすことができない行動原理であると見

ることも可能だからです。

このように書くと、「いじめ肯定論」だと誤解するむきがあるかもしれませんが、もちろんそうではありません。

たとえばあなたが属している集団の中に、自分の利益だけを追求し、まわりに迷惑をかけても平気な人がいたら、あなたはその人に対してどう対応するでしょうか。

あなたが受ける迷惑があまりひどくなければ、たぶんほうっておくでしょう。しかし我慢できなくなるほど迷惑がひどくなれば、何とかその人と話をして、その迷惑行為をやめてもらおうようにしようとするでしょう。でも、それでも駄目な場合には、どうしたらいいでしょうか。

まず第一に考えられるのは警察に訴える——上からの権力に頼る——ことです。もう一つの選択肢として考えられるのは、そうした迷惑なことをしている人に対する制裁として、まともに付き合うのは止める、ということ。つまり、集団からの排除という選択肢です。

まわりの人たちからの説得に耳を貸さない人に対しては、警察に代表される公権力に頼るか、自分たちで困った人を排除するように努力するか、どちらかの方法しかないわけですが、すべてのトラブルの解決を権力に頼り切ってしまうことに大きな問題があるのは、今さら言うまでもないでしょう。日常の小さな紛争にまで公権力が介入するようになってしまつては、行動の自由もない警察国家、監視国家が生まれてしまう危険性があるわけですし、また、そのような警察国家を維持するためには大変なコストを必要とします。

やはり権力に頼ることなく、自分たちで社会の秩序を維持するのが一番いい解決法であるというわけなのですが、権力に頼り切らないで何とかしようとするれば、先に定義した意味での「いじめ」を使わざるをえなくなるのです。つまり、集団のルールにしたがわずに、みんなに迷惑をかけても平気な人には排除をはじめとする「いじめ」で、思い知らせるしか方法はないというわけ
です。

もちろん、そのような場合のいじめ、つまり自発的な秩序形成の手段としての排除行動は、ふつうは「いじめ」という言葉ではなく、「集団のルール」「地域のまとまり」のためといった、もつと耳触りではない言葉で呼ばれていますが、自分たちの規範や基準にあわない人たちを排除するという点では、子どもたちの間でのいじめと何ら変わるものではありません。

かつては存在した「いじめ教育」

そこで学校での「いじめ」に話を戻せば、監視や教育によって——言い換えるならば、上からの権力によって——子どもたちのいじめをなくすことはできるかもしれません。しかしそうすることは、自分たちで自発的に社会秩序を作っていくという、人間にとって一番重要な心の働きを取り去ってしまうことを意味しているのです。

だからといって、もちろん、いじめは良いとか、いじめを奨励すべきだと言っているわけではありません。

たんなる好き嫌いや些細な理由で被害者を選んで、意味のない「しかと」や意地悪を繰り返すといったいじめは、とても許されるべきではありません。

子どもたちのそういったいじめが許されないのは、それが「間違った排除行動」だからです。つまり、「正しいいじめ」「適切な排除行動」の教育をちゃんと受けていないので、自分たち自身で適切にコントロールできないかたちで無差別にいじめをしてしまうというのが、現代の子どもたちのいじめの問題なのではないかと思っています。

一昔前までは、上級生から下級生までをふくむ子どもたちのグループがあつて、そのグループの中で自発的に秩序が作られていました。もちろんそういったグループの中では、乱暴なガキ大将が小さな子どもをいじめていたこともあつたでしょう。また、疎開してきた都会の子どもたちが生意気で気に食わないからという理由でいじめられたこともよくあつたでしょう。しかし、今の子供たちのように、理由もなくいじめの被害者が選ばれるということはあまりなかったように思われます。

さらに時代を遡れば、子どもたちが少し大きくなると、若者宿、若衆宿といったグループに入られ、そこで村の一員として生きていくための基礎訓練がなされてきました。そういった子どもたちのグループや若者のグループで教えられたのは、どのような行動が正しくて、どのような行動が許されないかという行動基準であり、またそういった基準に違反する人間に対するいじめをどう行なうかという、いわば「いじめ教育」でもありました。

逆にいえば、そういったグループでは、どうすればいじめを避けることができるのかという教育もされてきたわけです。

ところが困ったことに、今の子どもたちには、学校以外の場でいじめ教育を受ける機会がまったくありません。そのため、意味のない無差別的ないじめをしてしまうのではないかと筆者は考えています。

しかし、だからといって、すべてのいじめをなくしてしまおうというのは、英語の表現を使えば「たらいの水と一緒に赤ん坊を流してしまう」ことになってしまわないでしょうか。そうなれば、後に残る選抜肢は警察国家、監視社会ということになってしまいます。

いじめを許す子どもたち

先に述べたように、子どもや若者宿といったグループでは、意味のない無差別ないじめが抑制されてきました。そういった無意味ないじめは、グループのリーダーによって抑制されていたからです。

そういったいじめ教育の場であるグループは、今の日本ではほとんどなくなってしまいました。その結果、いじめをし放題な環境ができあがってしまったのです。

結局のところ、日本のいじめに問題があるとすれば、それはいじめをする側にあるのではなく、「いじめを許す」環境が学校の中にできてしまっているところにある。そう解釈するのが、

より現実的と言えるのではないでしょうか。

実際、いじめについて、ひじょうに有益なフィールド・ワークを行なっている京大霊長類研究所の正高信男氏まさたかのぶお（比較行動学）の研究によれば、いじめ問題が起きている教室とそうでない教室とでは「傍観者」の比率がまったく違うという事実が明らかになっています（『いじめを許す心理』岩波書店）。

つまり、いじめ問題が起きているクラスでは、多くの生徒たちが傍観者の態度に終始していて、目の前で行なわれているいじめを止めたりする子どもがいない。これに対して、いじめ問題が起きていないクラスの子どもたちには、そうした傍観者の態度を取る子どもが少ないというわけなのです。

やはり、カギは「いじめをさせない」ことにあるのではなく、「いじめを許さない」環境を作ることにあるというわけです。

では、いったい「いじめを許さない環境」はどのようにすれば作ることができるか――。

それについての詳しい解説はのちほどゆっくり書くつもりですが、ここで私がみなさんにもまず知ってもらいたいのは、社会問題の解決を考えるためには「心がけを改めよう」などといった安直なスローガンに乗せられてしまうのではなく、もつと物事を根源的に考え、物事の本質的な部分に目を向けていただきたいたいということなのです。

「お説教」では世の中は変わらない

さて、「いじめ」の話が長くなってしまいました。

話を戻せば、本章の冒頭でも書いたように、今の日本ではいじめにかぎらず、さまざまな「不祥事」が起きています。たしかに、それらは重大な、深刻な問題であるのでしょうか。

しかし、たとえば食品の賞味期限を偽装した企業を批判し、その経営陣を退陣させれば、それで問題ははたして解決するのでしょうか。あるいは、いじめを起こした子どもを逮捕して、少年院に送れば、それで問題は解決したと言えるのでしょうか。

もちろん、問題を起こした当事者たちの責任を問うことは大事なことです。しかしながら、似たような不祥事が起きるたびに、まるで「モグラ叩き」のように責任者をつるし上げていくことが、はたして本当の解決と言えるのでしょうか？

それよりもやるべきなのは、なぜここに来て似たような不祥事が起きるようになったのか、その事情をきちんと分析し、対策を立てることではないでしょうか。

といつても、もちろんその対策なるものが「心がけを改めよう」式のスローガンであつては問題外というものです。

経営者たちのモラルを向上させよう、子どもたちに道徳教育をしよう——そうした「お説教」で問題が解決するのであれば、今ごろ、私たち人類は何一つ犯罪が起きることもない「地上の楽園」に住んでいるはずです。

では、いったいどうしたらいいのか。

そこで出てくるのが「人間とは何か」の研究だというのが私の考えなのです。

我田引水がでんしんすいに聞こえるかもしれないませんが、人間の心の働きを知り、私たちの心の中にある「人間性」の本質がどのようなものであるか、そうしたことをきちんと理解していくことが、私たちの社会で起きているさまざまな問題を解決する糸口になってくると思うのです。

「理性万能主義」からの脱却

脳科学や生物学などの急速な発展もあって、人間の心に関する見方や考え方は今や大きく変わっています。

タブラ・ラサの話がいみじくも示しているように、近代西洋思想では長らく「人間至上主義」「理性万能主義」が信じられてきました。

すなわち、人間と動物とはまったく別の存在であり、人間の理性の力があれば、あらゆる問題が解決できると広く信じられてきたのです。それは筆者が研究する心理学の分野も例外ではありません。

しかし、科学の進展は、そのような思想が「神話」にすぎないことを今や明らかにしつつあります。「我思う、ゆえに我あり」と言った一七世紀の大哲学者デカルトから始まるとされる近代西洋思想は、今や大きな転換点を迎えているといっても過言ではありません。

ところが、残念なことに「教育で心を変えられることができる」という意見が何の疑いもなく受け容れられていることでも分かるように、タブラ・ラサのような「神話」が今なお生き残っていて、それが社会問題を考えるうえで、本質を見失った議論がえんえんと続けられる原因になっていると私は考えているのです。

では、いつたい今の日本で起きているさまざまな社会問題をどのように考えていけば、「本質」に迫る解決策が見えてくるのか——その私なりの答えを、私がこれまで行なってきた研究成果を踏まえつつ語っていききたいと思います。

「日本人らしさ」

という幻想



右も左も「日本人らしさ」がお好き？

いじめにかぎらず、今の日本ではさまざまな社会問題の解決を「心」に求める風潮がひじょうに強くなっているのはすでに述べたとおりですが、そうした傾向の中でも、私が最も不満に感じるのは、今の日本が抱えているさまざまな社会問題の原因や解決策を、「日本文化」や「日本人らしさ」に求める傾向です。

すなわち、「かつての日本人は正直者で、信義に厚く、モラルもあつた。しかるに今どきの日本人は古きよき日本の心を忘れてしまっているために、いろんな問題が起きてきているのだ」と解説する人は少なくありません。

今の日本経済がけっして順風満帆でないのも、社会のモラルや秩序が乱れているのも、いじめや少子化問題が解決しないのも、すべてそうした「日本人らしさ」「日本の文化伝統」がなくなってしまうからだとはよく言われる話です。

こうした意見が保守的な立場から述べられたのだとすれば、いわゆる改革派の人たちはどういふふうに住の日本の現状を考えているのでしょうか。

実は、改革の旗を掲げる人たちもまた「日本人らしさ」や「日本的な心」が問題だと考えているのです。

つまり「今の日本が問題を抱えているのは日本人が過去の伝統にしがみつき、島国根性から脱却できずにいるのが元凶なのだ」というわけです。こうした改革派の人たちにとっては、保守派の人たちが褒めそやす日本人特有の精神構造や日本文化こそが、日本の社会や経済がいつこうにもよくなる最大の原因で、もっと欧米人のようなメンタリティを持ち、グローバル化しないといけないというのです。

まったく立場を異にするはずの保守派、改革派のどちらから見ても、問題の焦点が「日本の文化」や「日本人らしい心」にあるという点で共通しているわけなのです。

そこで私の考えを述べさせてもらえば、実は何でもこうして「日本人らしさ」に結びつけて考える、その思考法自体が、今の日本の混迷を招いているのではないかと思っっているのです。

文化の違いが「らしさ」を産み出した？

では、なぜ現代日本が抱えている社会問題を「日本の文化伝統」や「日本人らしさ」と結び付けて考える議論がおかしいのでしょうか。

それはそもそも「日本人らしさ」という概念自体がどれだけ実体のあるものだろうか、私が疑っているからに他なりません。

「日本人らしい心は本当に存在するのだろうか」なんてことを書けば、おそらく多くの人は「心理学者のくせして、何を馬鹿なことを言っているのか」と思うに違いありません。

たしかに、同じ状況に直面したとき、日本人とアメリカ人ではまったく違うモノの見方をしたり、まったく異なる行動を選択することがあります。その違いが「日本人らしさ」であり、「アメリカ人らしさ」であると言えなくはありません。私が研究している心理学の一ジャンルである「文化心理学」でも、そうした文化圏ごとで人間の考え方や感じ方がどのように異なっているかを研究するのが大きなテーマになっています。

しかし、そうした「らしさ」が、日米それぞれの文化伝統が産み出した、不変のものであると考えるのは、あまりにも乱暴な議論のように私には思えてならないのです。

一例を挙げて、考えてみましょう。

「日本人は家族よりも会社を大切にする企業人間だ」という話は日本でも、アメリカでも広く受け容れられているイメージです。

今でこそ、だいたい「アメリカナイズ」されたとはいえ、日本人は自分個人としての利益を犠牲にしてでも、集団全体の利益を優先する傾向があり、個人の価値観を優先するアメリカ人とは一八〇度違うのだという話はよく言われます。そして、そうした日本人のメンタリティーは「聖徳太子以来、和の精神を重んじてきた日本独特の文化伝統」がもたらしたものだと言説されるのが普通です。

しかし、はたしてそうした解説は本当なのでしょうか？

日本人は、はたして「会社人間」か

日本独自の「和の文化」が、日本人の愛社精神や滅私奉公めつしほうこうの精神を作り出したという話が実はかなりの「眉ツバ」であることは、戦国時代を振り返ってみれば、すぐに分かることです。

よく知られたことですが、戦国時代の武士たちは下は足軽から上は大名まで、現代のアメリカ社会と同じように、みなが実力主義の原理で動いていました。江戸時代の武士たちが主君への堅い忠誠を誇っていたのとは対照的に、自分の能力をきちんと評価してくれない「上司」ならば、さっさと見限って転職するべしということが戦国時代の常識であったと言えます。

そこで、この時代の武士たちは混乱した戦場でも自分の働きぶりが分かるように、背中に旗印を立て、「遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。我こそは何の何兵衛である」と自分を売り込んでいたほどです。

この一事を見るだけでも、「日本の文化伝統が愛社精神をもたらした」という解説が根拠薄弱であることがお分かりいただけるでしょう。

もちろん、このような私の考えに対して反論をする読者がおられるかもしれませんが。

つまり、「たしかに戦国時代などの例外はあるかもしれないが、江戸時代以来の四〇〇年近く、我が国に滅私奉公の精神が連綿と受け継がれてきたのは事実だ。やはり、これは日本の文化が作り出した我が国独特の精神と言ってもいいのではないか」というわけです。

しかし、これに対しても私は疑問を抱いています。

そもそも、もし、日本のサラリーマンたちが本当に自分の会社を愛し、会社に忠誠を尽くしているというのであれば、会社の業績が落ち込んだとき、率先して自分たちの給料を下げてくれと願ひ出るのが当然です。自分の生活がたとえ苦しくなろうとも、会社の存続こそが大事と考えてこそ、本物の会社人間というものでしょう。

しかし、残念ながらそういう話は寡聞にして筆者は知りません（もし、あったとしてもそれは滅多にない「美談」として語られているはずですから、日本人一般の特性を証明するものにはなりません）。

なぜ、武士たちは「お家大事」で働いたのか

では、そこまで会社に忠誠心を持つているわけではないのに、なぜ日本人は家庭生活を犠牲に

しても、会社のために一生懸命働くのでしょうか。

その理由は次のように解釈するのが、最も合理的ではないでしょうか。

日本のサラリーマンが会社に忠誠心を示すのは、そうやって振る舞うことが日本の社会において最も適応した行動であるからに他ならない——分かりやすく言うならば、会社に対して忠誠心を示したほうが何かとトクをするから、そうしているだけにすぎない。だから、日本人は会社人間になったというわけです。

戦後長らく続いた終身雇用制度の下では、日本のサラリーマンはアメリカ人のように転職によってキャリアアップすることが事実上、不可能だったので、出世しようとするのであれば、自分が今現在、属している会社での評価を上げることしかありませんでした。

そのためには、いつまでも会社から帰らずに残業していたほうが、会社にアピールできるというものだし、休日返上で働いたほうが上司の評価も高くなるというものです。だからこそ、日本のサラリーマンたちは会社人間であることを選択した——こう考えるのが、最も現実的な解釈だと言えるでしょう。

江戸時代の武士たちが滅私奉公であったというのも、結局は同じ理由です。「転職」がいくらでもできた戦国時代とは違って、江戸時代では主君を替えるわけにはいきません。子どもや孫の代までも同じ殿様に仕えることになるのですから、常日頃から忠義ぶりを示していたほうが得策だった。だからこそ、江戸時代の武士たちはお家大事、殿様大事で働いていたというわけです。

「日本人らしさ」とは、生き抜くための戦略だった

さて、話を元に戻せば、私たちは日本の文化伝統が「日本人らしさ」を作り出し、アメリカの文化伝統が「アメリカ人らしさ」を作り出していると考えがちです。

なるほど、たしかに行動だけを見れば、日本人はアメリカ人よりもずっと会社人間的であつて、それが「日本人らしさ」の一部を構成しているように思えてしまいます。

しかし、それを細かく検証していけば、実は昔から日本人は集団主義的であつたわけでもないし、本心から会社や藩を大事に思っているわけではありません。要するに、そうした「日本人らしさ」なるものは、実は日本の社会で生きていくための知恵、むずかしい言葉で言えば「戦略的行動」に過ぎないのではないかというのが私の考えであり、私が研究している「社会心理学」の考えであるのです。

つまり、日本人とアメリカ人の行動パターンの違いは、文化の違いがもたらしたものというよりも、その人が置かれている「環境」、つまり社会のあり方がもたらしたものにすぎないというわけです。

実際、世界的に有名であつた日本人の「会社人間」ぶりも、近年、終身雇用制や年功序列制が崩壊してしまつたと、あつという間に昔話になつた感があります。かつての日本では、いったん就職した会社を辞めて転職するのは不利なこととも思われていたのですが、今ではよりよい働き場所を求めての転職は当たり前のことになりましたし、また派遣社員やフリーターのような、従来

になかった仕事のしかたも広がっています。

つまり、日本の社会という「環境」が変わることで、生きるうえでの「戦略的行動」も変わり、その結果、「日本人らしさ」のあり方も急速に変貌してきたというわけなのです。

結局のところ、「日本人らしさ」とはけっして不変のものでもないし、日本独特のものでもない。そう断定してもけっして過言ではないと私は考えます。

ところが、今の日本のさまざまな議論を見てみると、あたかも「日本人らしさ」が不変のものであるかのような前提で語られています。

保守派の人たちは「日本人らしさ」が失われていくことが大変な危機であるかのように憂えていますし、また改革派の人たちは「日本人らしさ」がすべての改革を邪魔していると警鐘を鳴らしています。

しかし、保守派の人たちにしても、改革派の人たちにしても、あまりにも「日本人らしさ」「日本らしさ」を過大評価しているのではないか——それが私の言いたいことなのです。

人間の心の中にある「自己高揚傾向」とは

いわゆる「日本人らしい行動」とは、単に日本の社会環境にうまく適応するための「戦略的行動」にすぎない——このことを確認するうえで、ヒントになる実験があるのでここでご紹介しましょう。

心理学に、「自己高揚傾向」という言葉があります。

人間には自分自身を評価する際、実際よりもポジティブなイメージを抱く傾向があるということが昔から心理学の世界では知られていました。

たとえばあなたが何かむずかしいことにチャレンジして、それに成功したとします。

その成功は、あなたの実力がもたらしたものであるかもしれないですが、本当のところ、それは偶然の結果であつたかもしれません。

しかし、たいていの人は成功したら「それは自分が頑張ったからだ」とか「自分には才能があるんだ」というふうに、自分に成功の原因があつたと考える——こうした心の傾向を指して、自己高揚と呼ぶわけです。

あるいは逆に、何か失敗をしたときに「自分のせいで失敗したんだ」とは思わずに、「本当はできたはずなのだが、今回はたまたま運が悪くて失敗してしまつた」と考える——これもまた、現実（＝本当は実力不足で失敗した）の姿よりも自分自身をポジティブに考えているわけですから、自己高揚傾向のもたらしたものだと言えるでしょう。

人間には誰しも自尊心があるわけですが、その自尊心が失われてしまうと人間は生きていく意欲もなくしてしまうかもしれません。そこでその自尊心にたえず「浮力」を供給し、自らを守つていくための心の働きとして自己高揚傾向があるのだろうと考えられてきたわけです。

東アジアには自己卑下の文化があった!?

ところが、心理学研究の発展の中で、「人類普遍の性質」とされてきた自己高揚傾向が日本ではあまり見られないばかりか、むしろ逆の「自己卑下傾向」が観察されるとするレポートが、二〇世紀末になって相次いで出されるようになりました。

たとえば欧米人などは、自分の成功を「自分自身の努力の結果」と自己高揚的に考えるけれども、日本人は「単に自分は運がよかっただけ」と考える傾向がある。また、逆に何か失敗をしたときに、欧米人は「運が悪かっただけ」と考えるのに対して、日本人は「自分の努力が足りなかった」と捉えるなどという具合に、欧米人と日本人では自己評価のバイアスが逆方向になっているのではないかというわけです。

さらに研究が進むと、どうも自己卑下傾向は日本のみならず、東アジア全体に広がるものではないかと言われるようになってきました。

こうした自己評価の傾向が、欧米と日本で一八〇度違ってしている理由について、「心と文化の関係」を重視する文化心理学者たちは、欧米と日本では「文化の中にある理想的人物像」（文化的自己観）が違うからだということを挙げています。

すなわち、欧米には何ごとにおいても積極的にチャレンジし、自分の特性を伸ばしていくことが善とされる文化がある。そういう文化の中で生きていくためには自己高揚傾向が必要とされるが、日本をはじめとする東アジア圏はそうではない。自らの欠点を見つめ、それを克服していく

ことで人間としての完成を目指すのが正しい生き方であるとする文化が東アジアにはあって、そこから自己卑下傾向が生まれてくるのだというわけです。

こうした説明はたしかに「なるほど」と思わせる部分があります。

アメリカ人が理想として考えるのは、名優ジョン・ウエインが演じたような西部の開拓者であり、彼らは危険をもともせず未開の地へ乗り込んでいきます。こうした場所を生きのびるには、謙虚で控え目にしていただけにはたしかに無理で、アグレッシブで自分自身の才能を積極的にアピールする人が歓迎されます。

一方、人々との調和を旨とする日本社会においては、個性的で人の前へ出るような人間はあまり好まれません。それよりも仏教などで精神を修煉したような、穏和で人格円満な長老タイプが尊敬を集めます。

こうした文化伝統を持つ日本社会では、人々の「心の性質」もおのずから謙虚になり、自己卑下傾向を示すようになるのだという、文化心理学者の説明はそれなりに説得力があるのも事実ですし、また世間で言われている「日本文化論」なども整合性があります。

「世渡りの方便」としての謙讓の美德

しかし、こうした解説に対して、反論を唱える人たちもいます。

「いや、日本には謙讓の美德というのがあって、人前で自分を高く評価する人はうぬぼれている

とマイナス評価されるから、とりあえず卑下しているだけにすぎない。本当に日本人の心に自己卑下傾向があるのかは疑わしいものだ」

つまり、日本人が自己卑下傾向を示すのは、そういう態度を取ったほうが日本社会ではメリツトが大きいから謙虚にしているだけのことであって、「日本人独特の心の性質」が産み出したものでも何でもない。要するに「タテマエ」と「ホンネ」を使い分けているだけのこと、もつとはつきり言ってしまうえば、日本人の心が欧米人に比べて本当に謙虚であるという保証はどこにもない、というわけです。

実は筆者は、こちらの考え方、つまり日本人の自己卑下傾向は日本の社会にうまく適応しているための「戦略」にすぎないという見方に賛成です。

そもそも人類の文明が発生したのはせいぜい数千年前のことで、しかも東洋と西洋のそれぞれが特徴的な文化を築いたのは、もつとあとのこと。生命の進化の歴史と比較すれば、ほんのわずかな期間でしかありません。そんな短期間で人間の心が東洋と西洋で正反対の傾向を示すようになったというのは考えにくい話です。

それに、そもそも日本人には欧米人と対極的に謙虚な心があるというのであれば、日本の戦国時代を、どうやって説明するのでしょうか。

前に記したように、戦国時代の日本人は自己アピールに熱心で、「下克上」の実力主義が当たり前とされ、個性豊かな武将が次々と現われています。こうした戦国時代の武将たちに、自己卑

下傾向があつたとは考えにくいのではないだろうか。

そうやって考えていくと、やはり日本人の自己卑下傾向は「世渡りのための戦略」と見るのが妥当であろうと思えてくるのですが、この考え方には、ただ一つだけ弱点があります。

というのは、もし、日本人が「ホンネ」と「タテマエ」の使い分けをしているだけで、本当のところは欧米人と同じく自己高揚傾向があるというのならば、他者が見ていない状況、たとえば匿名状態で調査をすれば「ホンネ」、つまり自己高揚の回答をしなければおかしいということになります。

ところが、さまざまな試験や調査を行なつて、匿名状態での日本人の自己評価を調べてみると、そのようなときでも日本人は自分を卑下する傾向を示すのです。この事実をうまく説明できないかぎり、「戦略」説も決め手に欠けてしまいます。

謎を解くカギは「デフォルト戦略」にあり

それにしても、いったいなぜ日本人は匿名状態でも、自己卑下をするのか——その謎を解くための仮説として私が考えたのは、「デフォルト戦略」の存在です。

先ほどから述べているように、日本人に自己卑下の傾向が強いのは、自分の能力を積極的にアピールするよりも謙虚な行動をしたほうが、この日本の社会ではトクをすることが多いから他なりません。

しかし、だからといって、いつでも我々日本人が謙虚にしているとはかぎりません。たとえば就職試験の面接や異性とのデートなど、積極的に自分をアピールしたほうがメリツトの大きい状況にあると思えば、普段は謙虚な人でも自分の長所を売り込むでしょう。

このように私たちは普段の生活において、「今、自分はどう振る舞ったほうがトクをするか」ということを意識的に、あるいは無意識に判断しながら暮らしていると言えるわけですが、しかし、いつでも的確に判断が下せるとはかぎりません。

たとえば相手が初対面であつたりしたときには、その人が謙虚さを評価する人なのか、それとも自己アピールを歓迎する人なのかは分からないので、どう振る舞うほうがトクなのかの推測は不可能です。しかし、日本の社会では積極的に自己アピールするよりも、謙虚な態度でいたほうが、相手がどのような反応をするか分からない場合でも、それで失敗をする可能性はずっと少ないのは間違いないでしょう。

このように「どうしていいか分からないとき」に「とりあえず」選択される「無難なやり方」のことをデフォルト戦略とするならば、日本人の場合、自己卑下をすることがデフォルト戦略になると思われます。

「デフォルト」という言葉はあまり耳慣れない言葉かもしれませんが、コンピュータのソフトを使ったことがある人ならご存じでしょう。

たとえば文章作成ソフトにはいろいろな字体が使えるように、「フォントの選択」ができるよ

うなオプションがついています。これは便利な機能なのですが、あなたが初めて文書作成ソフトを使う場面を想像してみてください。「フォントの選択」と言われても何のことか全くピンときません。どうしたらいいのか、何を選択したらいいのかわからないわけです。

もし「フォントの選択」をすることができなければ文書作成ソフトを使えないというのであれば、あなたは困ってしまいます。そこで、何も知らない人が何を考えなくても使えるように、通常は何かのフォント（例えば明朝体）があらかじめ「初期値」として設定されています。

この、初期値としてあらかじめ設定されているオプションが「デフォルト」オプションです。つまり、何も選ばない時に使うようにあらかじめ設定されているものが「デフォルト」なのです。話を戻せば、自分を卑下するかどうかにかぎらず、私たちはこうした「デフォルト戦略」をさまざまなパターンで持っているだろうと推測できます。

たとえば、町を歩いていて「こんにちは」と挨拶あいさつされたらどうするでしょうか。

普通の人は相手から「こんにちは」と声を掛けられたときに、よほどその人と仲が悪いなど、特別な事情がないかぎりには気軽に挨拶を返すはずで、そのたびに「今、この人に愛想よくしておいたら、何かトクをすることがあるだろうか」と考えたり、「この人に挨拶を返さなかったら、どんなデメリットがあるか」という計算をしたりしないものです。

つまりこの場合、挨拶されたら挨拶しかえすというのが、挨拶に関するデフォルト戦略ということになるわけです。

日本人の「ホンネ」を探る

日本人が匿名状態の実験であっても、自己卑下の傾向を示してしまうのは、おそらくこうしたデフォルト戦略が選択されたためではないか、というのが私の考えた仮説です。

普通の人にとっては心理学の実験を受けるのは経験のないことなのですから、どう行動すべきかについて判断に迷うのは、むしろ当然なかもしれません。たとえ匿名性が保証されていると言われても、それを信じて素直にホンネをさらけ出せる人は案外少なくて、「とりあえず」「無難な」戦略として、卑下することにしたのではないかとというのが私の推測でした。

しかし、それで匿名状態で日本人が卑下する傾向を見せることが説明できたとしても、いったいどうすれば自己卑下という「デフォルト戦略」を発動させることなく、実験参加者に「ホンネ」をさらけ出してもらうことができるでしょうか。

そこで私は次のような実験をすることにしました。

この実験では、北海道大学の学生たちに「総合認知能力テスト」と称する二〇問のテストをやってもらい、その試験の直後に「あなたの成績は大学平均よりも上回っていると思いますか、それとも下回っていると思いますか？」という質問を出します。

もし、この学生たちに自己卑下や自己高揚といった自己評価の偏りが^{かたよ}りがないとしたら、このときの答えは「上回っている」と「下回っている」とがだいたい同じ数になっているはずだ。

なぜならば、この段階では、実際に自分が平均より上か下かを知る材料は彼らにはまったくあ

りません。この種のテストを受けた経験もないし、他にどんな人たちがテストを受けたのかも分からないので、自己の成績については当てずっぽうに答えるしかないからです。

そこで実際に尋ねてみると、およそ七割近い学生たちが「自分は平均より下だろう」と答えました。ですから、まさにこれは自己卑下傾向があるということになります。

ですが、これがはたして実験参加者のホンネかどうかといえ、大いに疑わしいところです。状況が分からないときには、とりあえず自己卑下をしておけば無難というデフォルト戦略が発動しているのではないかと疑われるからです。

やはり日本人にも「うぬぼれ心」はあった

そこで、私はもう一回、これと同じ実験を別の参加者たちを相手にやることにしました。

ただし、このとき、一つだけ条件を変えることにしました。

それは、先ほどの質問をこのように変える、というものでした。

「あなたの成績は大学平均よりも上回っていると思いますか？ 下回っていると思いますか？

もし、あなたの自己評価が当たっていたら参加謝礼の七〇〇円とは別にボーナス三〇〇円を出しますよ」

このとき、参加者の回答はどうなったと思われませんか？

何と、このボーナスを付けたとき、回答者のおよそ七〇%が「私は平均より上だと思う」と答

えたのでした。

断わっておきますが、ボーナスはあくまでも「自分の成績が平均より上か下か」を正しく当てたときにしかもらえないのですから、参加者たちは見栄を張る必要も、謙虚になる必要もありません。

つまり、正真正銘のホンネで、自分の試験成績が平均より上か下かを考えてもらうと、七割の人が「自分は他の人より成績がいいはずだ」と答えた——ということとは、実は日本人の心にも、欧米人と同じように「うぬぼれ」のバイアス、すなわち自己高揚傾向があるということを、この実験は示唆しています。

つまり、日本人の心の働きも、アメリカ人の心の働きも、そう大差はないというわけです。

また、それと同時に重要なことは、日本人が自己卑下傾向を見せるのはあくまでも、謙虚にしたほうが日本社会ではメリットがあるからにすぎないという事実です。

本来、日本人も心の性質として自己高揚の傾向を持っているのであれば、アメリカ人と同じように自分の能力をポジティブに評価して、人前でも積極的に自己をアピールしても不思議ではありません。

しかし、実際にはそうならないのは、日本の社会では特定のシチュエーションを除けば、自己評価をストレートに外に表わすよりも、謙虚な形で示したほうが失敗したときのダメージが少なく、むしろメリットも多いからです。

つまり、「日本人らしい」と思われていた謙虚さとは、日本人が本来的に持っている心の性質などではなく、日本の社会にうまく適応するための「戦略」として生まれてきた態度だったというわけです。

はたして日本人は「みんなと一緒」が大好きなのか

こうした「日本人らしさ」への誤解は、自己卑下の傾向だけに限った話ではありません。もう一つだけ似たような例を紹介してみましよう。

文化と心の性質との関係を研究テーマにする文化心理学で唱えられている仮説の一つに、次のようなものがあります。

それは「欧米社会には『相互独立的自己観』と呼ばれる信念群が共有され、東アジア社会には『相互協調的自己観』が共有されている」というものです。

分かりやすく言うならば、欧米の人たちは「自分は他人と違うユニークな存在である」と考え、分かりますく言うならば、欧米の人たちは「自分は他人と違うユニークな存在である」と考え、「自己主張することが自分の望む結果を得る最良の方法だ」と信じているのに対して、日本人を含む東アジアの人々は「他人と違っていいのは好ましくない」と考える傾向があつて、「他人と協調するのが自分の望む結果を得る最良の方法である」と信じている。分かりやすくいえば、東アジアの人たちは「みんなと一緒」が一番いいと思つていてというわけです。

こうした文化心理学の考え方は、世間一般で言われている「日本人らしさ」のイメージと共通

するものがあるのは言うまでもないでしょう。

日本人はスタンドプレーが嫌い、あるいは苦手で、他人との共同作業でその力を発揮する、とよく言われますが、そうした日本人の特徴をもたらししているのが「相互協調的自己観」という心の性質にあるというわけなのです。

さて、こうした仮説を検証するために、文化心理学者たちが次のような実験を行いました。

それは、空港で飛行機を待っている旅行者たちに簡単なアンケート（専門用語では「質問紙調査」と言います）を行なうというものなのですが、その際、

「調査に協力してくれたお礼に、記入に使ってもらうペンを差し上げます」

と言って、袋から五本のペンを取り出します。

実はこのペンを選ぶことが実験の主眼で、質問紙調査のほうはそのためのフェイク、目くらましのようなのです。

さて、ここで差しだされた五本のペンはどれも同じ形状をしているのですが、そのうち一本か二本、他のペンと違う色のものが混ざっています。

勸のいい読者なら、もう察しがついていることでしょうが、この実験は「二種類のペンがあったとき、欧米人と東アジア人では選び方が違うはずだ」ということを検証するためのものなのです。

つまり、「協調性を重んじる東アジア人は多数派のペンを好んで選ぶだろうし、また個性を重

んじるアメリカ人は少数派のペンを好んで選ぶだろう」というわけなのですが、実験の結果はまさに、その予測どおりになったのでした。実験に参加したアメリカ人のうち、少数派のペンを選んだのが多数派を占めていたのに対して、東アジア人で少数派のペンを選んだのはわずかに二割くらいしかいませんでした。

この実験を行なった文化心理学者たちが「これによって東アジア人には『相互協動的自己観』が共有されているのが確認できた」と結論づけたのは言うまでもないことです。

さっそく追試を行なう

さて、この実験を聞いて、あなたはどう思われたでしょう。

ペンを選ぶという、この実験の分かりやすさ、そして「東アジア人は横並びが好きで、欧米人はユニークさを求める」という結論は、なるほど一見するともっともらしく感じてしまいます。しかし、専門誌に発表された、この実験に関する論文を最初に読んだとき、私はすぐに「これはおかしい」と思ったのでした。

人間がある行動をしたからといって、その行動が本当にその人の心を反映しているとはかぎりません。

部下が上司に向かって「ボスはすごい人ですね」と賞賛したからといって、その部下が本心から上司を尊敬していると決めつけるのは早計というものでしょう。

たしかに、部下は上司のことを尊敬しているのかもしれませんが、その一方で「ここでとりあえず褒めておけば、上司との関係がよくなる」という打算が知らず知らずのうちに働いている可能性も大なのです。

実験の結果、多数派のペンを選んだ東アジア人が多かったというのも、本当にその人たちが「他人と同じもののほうが好き」と感じたとはかぎりません。先ほどの自己高揚実験のときと同じく、「状況が分からないときには、多数派のペンを選んでおいたほうが無難だ」というデフォルト戦略が選ばれていたと見たほうが自然というものではないでしょうか。

そこで私はこの実験を追試することにしました。

実験に参加してもらったのは合計六〇〇名ほど北海道大学とスタンフォード大学の学生たちです。この人たちは別の社会心理学実験のために集まってもらっていたのですが、彼らに対して実験前に「参加のお礼として、ペンを差し上げます」と言って、四本の同じペンと一本だけ違うペンの合計五本から選んでもらうことにしました。

人が見ていないところでは態度が変わる日本人

ここまでは文化心理学者の行なった実験と同じなのですが、日本人を対象とする実験では二種類の状況を作ることになりました。

最初の実験では、五本のペンを実験者が参加者に差しだして、その場で選んでもらっていたわ

けですが、私の実験では、それとは別のシチュエーションを追加しました。

それは五本のペンを直接差しだすのではなく、ペンを入れた缶を実験参加者の机の上に置いたままで実験者が立ち去ってしまうというものです。

「私（実験者）は出てしましますが、缶の中のペンをどうぞ自由に一本お取りください」というわけなのですが、さて、人が見ているか見ていないかで、実験に参加してくれた人たちの行動はどう変わったでしょうか。

この実験の結果は、私の予想どおりでした。

ペンを選ぶ際に実験者が立ち会っている場合、空港で行なわれた実験とほぼ同じ結果になりました。

アメリカ人学生の場合、少数派のペンを選んだ人は四二%でしたが、日本人ではその半分近くの二三%程度しかいません。明らかにアメリカ人のほうが少数派ペンを選んでいきます。

ところが、目の前に他人、つまり実験者がいない状況になると日本人でも少数派のペンを選ぶ人がぐっと増えるのです。

先ほども書いたように目の前に他人がいる場合だと一本きりのペンを選んだ人は二三%しかいなかったのに対して、目の前に他人がいないと選ぶ率は三五%にはね上がります。

もし、文化心理学者が言うように、ペンを選ぶ理由が「少数派ペンと多数派ペンに対する好みの違い」にあるのなら、他者が見ていようといまいと関係なく、日本人は多数派のペンを選ぶ

はずです。

しかし、実際には他人の目があるかないかで結果が違ってくるのですから、それは日本人の「好み」や「価値観」と直接の関係はないということになります。

さらに日本人の「ホンネ」を探る

しかし、それでも読者の中には「たしかに他人の目がないと、日本人でも少数派のペンを取る人は増えたかもしれない。だが、それでもアメリカ人よりも、その比率は少ないではないか。やはり、日本人のほうが『横並び意識』が強いのだから文化の差は厳然とあるのだ」と反論する人もあるでしょう。

なるほど、たしかに数字だけを比較するならば、実験者が目の前においてもアメリカ人は四二%が少数派のペンを選んだわけで、実験者不在で少数派のペンを選んだ日本人が三五%しかないのですから、その差を無視するわけにはいきません。

しかしこれはおそらく、前に紹介した自己卑下傾向の実験と同じく、たとえ誰も見ていない状況下であっても、無難な「デフォルト戦略」として、多数派のペンを選ぶ人が少なからずいたということだと思われれます。

したがって、こうした「デフォルト戦略」を選ぶ必要のない状況を作ってやれば、日本人もアメリカ人も同じような選択をするのではないかと私は考えて、次のような実験でそれを検証して

みることにしました。

日本とアメリカでそれぞれ五〇名程度の学生を集めて、次のようなシナリオに基づく質問紙調査をします。

「学生たち五人でアンケート調査に協力し、そのお礼として少し高級なボールペンをもらえることになりました。『お礼としてペンを一本差し上げますので、この箱の中から好きなペンを選んでください』と言われたので、ペンを見てみると五本とも同じ形なのですが、外側の色が他のペンと違うものが一本だけありました」

この調査では「このような状況になったとき、あなたならどちらのペンを選びますか」と質問がなされるのですが、その答えの結果を見ると、やはり実際にペンを選んでもらった前回の実験と同じく、アメリカ人のほうが少数派ペンを選ぶ傾向にあります。

ここまでは前回と同じですが、質問はまだ続きます。

第二番目の質問では、先ほどのシナリオが繰り返されたあと、最後に次の一文が付け加えられます。

「一番端の席に座っているあなたが、五人の中で最初にペンを選ぶことになりました」

さあ、この状況ならば、あなたは何色のペンを選びますか、というわけです。

さらに第三番目の質問では、こうなります。

「五人が順番にペンを選ぶことになったのですが、座席の関係であなたは最後にペンを選ぶこと

になりました。順番がやってきて箱を見ると、五本のペンが残っています」

言うまでもないことですが、二番目の質問のシナリオでは、もし最初に少数派のペンを選んでしまえば、他の人たちは必然的に多数派のペンを選ぶしかありません。逆に、三番目のシナリオならば、あなたがどの色を選ぼうと、他の参加者に何の影響もありません。

やはり日本人もアメリカ人も変わらない

さて、この追加の二つの質問の結果はどうなったと思いますか？

実は、このように状況を明確化していくと、アメリカ人も日本人も答えは変わらなくなってくるのです。

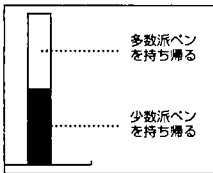
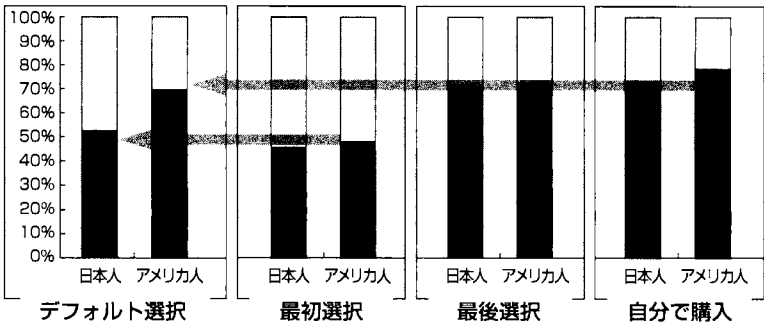
自分が最初にペンを選ぶという状況に置かれたとき、少数派ペンを選ぶだろうと答えた人たちは、アメリカ人でも日本人でも五〇%弱でした。これに対して、ペンを最後に選ぶシチュエーションに置かれたとき、少数派ペンを選ぶと答えた人たちは日米双方ともに七〇%近くになって、統計的に見て、ほぼ同じ水準であることが分かりました。

このことはいったい何を意味するのでしょうか。

それは要するに、自分が置かれている状況が明確であるときには、日本人もアメリカ人も同じような選択をするということに他なりません。

「五人の中で最初にペンを選ぶ」という状況（最初選択）においては、自分の選択が他の人たち

図1 実はアメリカ人も日本人もペンの好みは変わらない



デフォルト条件での選択では、ペン選択に関して日米差があるように見えるが、状況を明確化してみると、日米間での差はほとんどなくなってしまう。日本人とアメリカ人の違いは、心の違いというよりは「デフォルト戦略」の違いであることが、これからも分かる。

に影響を与えることが明白です。そうしたときに、デフォルト状況では七割が少数派ペンを選んでいたアメリカ人も、日本人と同じ程度の「遠慮」をするようになります。

一方、自分の選択が他の人に影響を与えないことが明確な「最後に選択する」（最後選択）というケースでは、日本人が少数派のペンを選ぶ率がアメリカ人とはほぼ同じレベルの七〇％になりました。

ちなみに、この調査では「ボールペンのインクが切れたので、文房具店にペンを買に行きました」という設定で、売り場に一本だけが色違いのボールペン五本があったときに、どちらのペンを選ぶかという質問もしています。

自分のお金を出してペンを買うのですから、これこそ自分の好みを優先させて買う状況なのですが、この場合、少数派のペンを選ぶ比率はアメリカ人でも日本人でもやはり七〇％近くになって、先ほどの「最後選択」の回答とはほぼ同じ結果になっています。他者の存在を気にすることなく自由に選択できる場合、日本でもアメリカでも七割くらいの方は少数派ペンを選ぶ傾向があるということが分かります。

日本人が多数派ペンを選ぶ本当の理由

こうして見ていくと、状況が明確であればあるほど日本人もアメリカ人も行動の傾向はほとんど変わらないということが分かるわけですが、日本人とアメリカ人では「自分の行動が他人にど

ういう影響を与えるか分からない」という状況においてどうするかという「デフォルト戦略」は明らかに違います。この点は重要です。

この実験で興味深いのは、デフォルト状況で少数派ペンを選ぶ人たちの比率が、日本人の場合、「最初選択」パターンとはほぼ同じになり、またアメリカ人の場合は「最後選択」パターンとほぼ同じになるという事実です。

この事実から推定されるのは、日本人の場合、「自分の選択によって他人に迷惑をかける可能性がある」という前提で行動するのがデフォルト戦略になっているということです。一方、アメリカ人の場合は「自分の選択は誰に迷惑をかけるわけではない」という前提で、自分の好みにしたがつてペンを選ぶことがデフォルト戦略になっているのだと思われれます。

では、なるべく他人の迷惑にならないよう行動するというデフォルト戦略をなぜ日本人は採っているのでしょうか。

その最大の理由は、控え目な態度を取る人間のほうが好ましい人物であると日本の社会では考えられているからです——と、書きたいところですが、実は少しだけ事実は違うのです。

というのも、先ほどの調査にはまだ質問がいくつか用意されていました。

一つ目の質問は、「五本のうちから一本のボールペンを選ぶ」というデフォルト状況のときに、多数派のペンを選んだ人と少数派のペンを選んだ人それぞれにどのような印象を覚えますか、というものです。答えは「あまりよくない」から「よい」までの九段階の尺度から選択してもらい

ます。

また、二つ目の質問では、多数派のペン、少数派のペンをそれぞれ選んだ人たちについて「世間一般の人はどのような印象を持つと思えますか」と尋ねています。

実はペンの色にこだわらない日本人

この二つの質問を組み合わせると、ひじょうに興味深い結果が出ます。

多数派、少数派それぞれのペンを選んだ人に対する実験参加者本人の評価は、日本の場合、ほとんど差がありませんでした。これに対して、アメリカ人のほうがむしろ多数派のペンを選んだ人に好印象を持っていたのでした。

つまり、日本人の場合、多数派、少数派どちらのペンを取るのが好ましいことなのかということに関して、明確な意見がない。すなわち、正直なところ、そんなことはどちらでもいいと考えている人が多いことを示しています。

ところが、これが「世間の人はどう思うと思えますか」という質問になると、回答はがらりと変わって「多数派を選ぶ人のほうが好印象を持たれる」という結果になってしまうのです。

このことから分かるのは、日本人がデフォルト戦略として多数派ペンを選ぶのは、他の人と同じペンを選ぶのが好ましいことだと自分自身で思っているからではなく、みなと同じペンを選ぶ人に対して、他の人たちが好印象を持つだろうと予測するからだということです。

すなわち自分個人の意見としては、少数派のペンを選ぶほうがいいじゃないかとたと思つても、世間の人は少数派ペンを選ぶ人に悪い印象を持つだろうから、少数派ペンを選ぶのは止めておこうと考えているというわけです。

なぜ「裸の王様」が続くのだろうか

この結果を見て、あなたは「変なことだなあ」とクビをかしげたかもしれません。

童話「裸の王様」では、詐欺師たちが「愚か者には見えない服」を王様に売り込んで、王様も家臣も騙されてしまいます。みんな、その不思議な服が見えていないのですが、自分が愚か者だと思われたくなくて「素敵な服だ」とウソをつくのですが、正直な子どもが「王様は裸だ！」と叫ぶと、みんな自分たちが騙されていることに気がつきます。

この「裸の王様」の物語と、多数派のペンを選ぶのがいいことだとは思っていないのに、多数派のペンを選ぶことを「デフォルト戦略」にしている日本人の姿とはよく似ているような気がしませんか？

多くの日本人が「少数派ペンを選ぼうと、多数派ペンを選ぼうと、どちらでもかまわないじゃないか」と内心で思っているのであれば、実際に少数派のペンを選んでも、周りの人はその人の評価を下げたりしないはずで。

だとしたら、多数派ペンを選ぶメリットは実質的に存在しないことになるのですから、多数派

のペンを選ぶことが「デフォルト戦略」になる理由もないはずなのです。

なのに、日本の社会ではなぜ「多数派を選ぶ」ことが無難な選択だとされ、それが続けられているのでしょうか。

こうなってしまった、そもその原因は「自分はどうでもいいとは思っているのだが、世間の人にはやはり多数派を選ぶ人を好むのだろう」とみんなが思っているからです。

ではどうして、このような「誤解」がいつまでも解消しないのでしょうか。どっちの色のペンを選ぼうとどうでもいいと自分は思っているが、ひょっとして他人も同じように考えているのじゃないのか、となぜ思い至らないのでしょうか。

あるいは、誰か正直者が「ペンの色なんてどうだっていいじゃないか！」と叫べば、日本の社会はアメリカ社会みたいに変わるのでしょうか。

実は、この「謎」を解くことが日本人と日本社会をめぐる、もう一つの「常識のウソ」を解き明かす有力な手がかりになるわけなのですが、それについて章を改めて考えていくことにしましょう。

日本人の正体は

「個人主義者」だった!?



あなたは「集団主義者」ですか？

さて、ここに簡単なアンケートがあります。わずか二問だけですが、よく考えてお答えください。

【第1問】 あなたの周りにいる人たち（日本人）は、アメリカ人や西欧の人に比べて、集団主義的な考えの持ち主が多いと思いますか？ それとも個人主義的な考えの人が多いと思いますか？

【第2問】 あなたは集団主義的な考え方をしていますか。それとも他の日本人よりも個人主義的な考え方をしていると思えますか？

少しだけ質問に補足をおけば、ここで言っている「集団主義」とは自分の利益よりも、自分の属している集団（会社や地域社会、あるいは国など）を優先させる態度や考え方を言います。

たとえば、会社のためなら自分の時間をある程度犠牲にしても働くべきと思うのは集団主義的な考えと言えます。これに対して、自分の時間をまず優先させた結果、会社の仕事が少々遅れることになったとしてもやむをえないと思うのは個人主義的な考えと言えるでしょう。

ここで改めて言うまでもないことですが、「日本文化論」の常識では、日本の社会は欧米に比べて集団主義的な傾向が強いとされています。日本の社会では「みんなで一緒」の集団行動が好まれるのに対して、欧米ではそれぞれ人間が自分の意見を主張し、集団で活動するよりも個人で活動するほうを好むと言われます。

さてこうしたことを踏まえて、先ほどの二つの質問を一般的な日本人にしたところ、多くの日本人は「自分自身は集団主義的な考え方をしていないが、周りの人たちは集団主義的な考え方の持ち主である」と思っていることが分かりました。

これをもう少し砕けた感じで書き直すなら、こんな感じになるでしょうか。

「周りの人たちは世間に合わせて、仕事でも勉強でも文句も言わずに頑張っているけれど、それ

はちよつと我慢しすぎじゃないかなあ？ やはり自分の考えを持つことは大事だと思うし、言いたいことはきちんと言ったほうがいいと思う」

さて、あなたの回答はどうだったでしょう？ おそらくこの「典型例」に近い人が大多数だったのではないでしょうか。

日本人のパラドックス？

なぜ、このような回答が一般的になったのかの解説はあとでゆつくりするつもりですが、この研究結果から見ると、次のようなことが仮説として言えるのではないかと思います。

「日本人は自分たち日本人のことを集団主義的な傾向があると考えているが、ただし『自分だけは例外』と考えている集団である」

これは何とも不思議な話です。

もちろん、これはあくまでも平均的な日本人ということですから、「周りの連中は自分の意見を主張したがる個人主義者ばかりだが、私はあくまでも社会のため、日本のために最優先に考えて行動している集団主義者だ」と思う方もおられることでしょう。

しかし、全体として見ると、この研究結果から考えるかぎり、日本という国は自分のことを個人主義者だと思っている人の集まりであるということになります。

では、いったい「個人主義者だらけの日本」が、どうして自他ともに認める「集団主義的な社

会」になってしまおうのでしょうか？

有名な論理学のパラドックスに「『クレタ人は嘘つきである』とクレタ人が言った」というものがあります。

もし、すべてのクレタ人が嘘つきだとしたら、「クレタ人は嘘つきである」と発言したクレタ人も嘘つきになってしまつて、つじつまが合わなくなるという話ですが、日本人が「自分以外はすべて集団主義者である」と言っているのはクレタ人のパラドックスと、どこか似通っているようにも見えます。

勘違いの原因は「帰属の基本的エラー」にあり

この「パラドックス」を解くための一つの鍵は、社会心理学で「帰属の基本的エラー」と呼ばれている現象にあります。

ここで「帰属」というのは「原因帰属」の略で、要するに「なぜ人はそんなことをするのだろう」と人の行動の原因を考えることを言います。

社会の中で暮らしている私たちは、自分の周囲にいる人が何らかの行動をしたときに「どうしてそんなことをしたのだろう」とか「どうして、こんなことを私にしてくれるのだろう」と、知らず知らずのうちに相手の意図を推しはかるように心が動くものです。

しかし、そうした推測がつねに正しいとはかぎりません。

そこで起きるのが「帰属の基本的エラー」と呼ばれるものなのですが、人間は相手が何かをし
たときにその原因をついつい「相手の心」に求めてしまう傾向があることが社会心理学の研究で
分かっています。

人間の行動が、つねにその人の本心から行なわれているものとはかぎりません。周りの状況か
らやむなくそういう行動をしている場合もありますし、第三者から強制されて、しぶしぶやって
いる場合もあります。

そんなことは誰でも分かっているのですが、こと他人がやった行為については、そうした
「事情」があつてのことではないかと思わずに、その人がそういうことをする「心の持ち主」だ
と考えるしまうのです。

たとえば、たまたま買い物に入ったお店で、とても愛想よく懇切丁寧に接客してくれた店員
さんがいたとします。そういう経験をしたときに、きつと、あなたはその店員さんのことを「い
い人だ」「親切な人だ」と思ってしまうのではないのでしょうか。

客観的に、冷静に考えてみれば、店員さんがあなたに丁寧に対応してくれたのは、接客のプロ
として立派であつたということにすぎません。

その店員さんは、仕事だからあなたに対して愛想よくしていただけのことで、本当は内心「早
く決めてくれないかなあ」「面倒くさい客だなあ」と思っていたのかもしれないのです。しかし、
多くの人はその店員さんの態度を見て「この人は心優しい、いい人だから、私に親切なのだ」と

思ってしまったし、場合によっては「私（お客）に好意を持っているから、こんなに親切にしてくれるのだ」とまで思ったりしてしまうものなのです。

このように、相手の行動から「相手の意図」を推しはかる性質が人間にあるために起きる認知の違いを「帰属の基本的エラー」というわけです。

余談になりますが、バーやキャバクラといった、女性が男性の接客をするお店は、この「帰属の基本的エラー」を積極的に活用（悪用？）していると言えるのかもしれませんが。

バーなどで働く女性にすれば、男性客に対して丁寧接客するのはビジネスの一環でしかないし、男性の側もお金を払って店に通っている以上、そのことは頭では理解しているのです。

しかし、自分に対して優しい態度をお店の女性が示すと、「私のことを商売抜きで好意的に思ってくれているから、こういうことをしてくれるのだ」と考えてしまうというわけです。

傍（はた）で見ている人間にすれば、「なぜ、簡単に騙されてしまうのだろう」といぶかしく思ってしまうものですが、そうした思わせぶりな態度に引つかかってしまうのは、その人が世間知らずで騙されやすいというだけではなく、人間の心に備わっている「帰属の基本的エラー」の仕組みが働いていること、とも言えるのです。

「集団主義のパラドックス」はこうして生まれた

さて、そこで先ほどの話に戻ることにしましょう。

「帰属の基本的エラー」を前提にして考えれば、日本人の多くが「他人は集団主義的だけれども、自分は個人主義だ」と考えているという話がけっして間違いでも、パラドックスでもないことが分かります。

すなわちあなたが「自分だけは個人主義的な心の持ち主だ」と思っているのと同様、他の人たちも「自分だけは個人主義的な心の持ち主だ」と思っているのです。

ただ、周りの人たちは——そして、実はあなたも——、人が見ているときには集団主義的に振る舞っているのです、その態度から推定した結果、あなたは「私とは違って、周りの人たちは集団主義的な心の持ち主だ」と思ってしまったというわけです。

こう考えてみれば、「みんなは集団主義的だが、私は違う」と思っている人が日本では多数派であるという話は、何の矛盾も来さないといいられます。

日常生活において、さまざまな事情から心ならずも集団主義的に行動してしまうという経験は、あなたもしょっちゅうしているのではないでしょう。

たとえばあなたが会社で残業したりするのも、心から「仕事をしなくてはいけない」と思っている場合ばかりではないでしょう。

上司から命じられたり、納期に間に合わずに叱られるのがイヤだったりするので、しぶしぶ仕事をしているということもあるはずですが、しかし、そうしたあなたの姿を見ている同僚たちは、「あいつは会社人間だから」と噂うわさをしているかもしれませぬ。

逆に、残業をしている同僚や先輩のを見て、「真面目で、責任感のある人だ」とあなたは思ってしまうのですが、当人はやはりあなたと同じように早く帰りたくて、イヤイヤ仕事をしているだけかもしれないのです。

このように、自分自身の残業に関しては、責任感があるからでも、愛社精神があるからでもないことをしっかり自覚しているものなのに、それが他人の行動になると「他人も自分と同じ」とは考えないで、その人は本心から集団主義的に行動していると思ってしまうわけです。

かくして日本人は多数派ペンを選ぶ

前章で紹介した「ペン選択実験」で、「どちらのペンを選ぶとかまわない」と内心では思っている人が多いのに、なぜ多数派のペンを選んでしまうのかということも、この「帰属の基本的エラー」が分かれば、理解できてくるはずですよ。

日本人がペン選択実験で、多数派のペンを選ぶデフォルト戦略を採用するのは「他人はきつと、多数派のペンを選ぶ人に好感を抱くに違いない」と判断しているからに他ならないのですが、「他人はきつと好感を抱くに違いない」という判断には、実は確たる根拠がありません。

周囲の人の行動や態度から、「私と違って多くの人たちは控え目だ」と思っているし、「そういう思慮深い人のほうが好かれるのだから、多数派のペンを選ぶのが正解なのだろう」と推定しているだけのことです。

人間は、こうした判断が実は間違っているのではないかとなかなか疑ったりしません。他人の行動から相手の心を推しはかかってしまう「帰属の基本的エラー」が起きているからです。

「裸の王様」では「王様は裸だ！」と叫ぶ少年がいたので、王様も家臣たちも自分たちが詐欺師に騙されていたことに気づきました。

しかし、この「帰属の基本的エラー」の場合はそうはいきません。

頭では「これは商売だ」と分かっているにもかかわらず、クラブやバーに通って女性に入れあげつづける男性がいることも分かるように、人間は相手の態度で心を推しはかかってしまうという習性から脱することがなかなかできないようになってきているのです。

思い込みが産み出す現実

「個人主義でもいいじゃないか」とみんなが内心思っているにもかかわらず、現実にはいつまでも集団主義が維持されてしまう——その理由の一つは、今述べた「帰属の基本的エラー」にあるわけですが、実はもう一つ重要な原因も関係しています。

それはみんなが内心、「個人主義的に行動したら、周りの人たちに嫌われてしまうのではないか」と思いこんでいると、その思い込みが本当のことになってしまおうという現象です。

たとえば、集団の中に一人だけ個人主義的に行動する人がいたとします。

あなたも周りの人たちも実は内心では「その程度のわがままならば、目くじらを立てるほどの

ことでもない。許してやってもいいじゃないか」と思っている、それを他の仲間がいる場所ではなかなか口に出して言うことはできないものです。というのも、そこで「あいつは困った奴だ」と他の人に調子を合わせておかないと、今度は自分自身が「他の人の意見に同意しない困った奴」と思われてしまう危険性があると考えてしまうからです。

こういった話はたとえば、町内会の井戸端会議などでもしょっちゅう起きていることです。

たとえば、ご近所のAさんについての悪口を言う人がいた場合、本当はそんなことはないと思っ
ついても、大声で悪口を言う人の話には口を合わせておかないと今度は自分が標的になってしま
うかもしれないと心配になってきます。そこでついつい心にもないのに「そうだよねえ、Aさ
んは困った人だわ」と言ってしまうというわけです。しかし、そうやってあなたが悪口を言うこ
とで、他の人たちもAさんを批判することになってしまいます。

このように「他の人たちは個人主義者に批判的だろう」と思いこんでしまうことで、実際には
誰もそうは思っていないまでも、個人主義者が批判されてしまう現実が生まれてしまうというわけ
です。そして、いったんこうした「現実」が作られてしまうと、みんなが心ならずもそれに合わ
せて行動しなくてはならなくなってしまいうのです。

集団主義と個人主義の話にかぎらず、このような実体のない思い込みが本当の現実を作り出し
てしまうというケースは、世の中にたくさんあります。

たとえば、「あの銀行はつぶれそうだ」という噂がいったん立つと、それを信じて貯金を引き

出そうとして銀行の窓口に並ぶ人が現われたとします。そうすると、つぶれるという噂が根拠のない話だと考えていた人たちも「こうして人々が貯金を下ろし始めれば、銀行の経営が危なくなるかもしれない」と貯金を下ろす列に並びはじめることになるので、本当に銀行の経営が危機に陥ってしまうというわけです。

こういった現象は社会心理学では、「予言の自己実現」と呼ばれているのですが、集団主義の社会で個人主義者が排除されるのも、人々が「個人主義者は嫌われるだろう」と「予言」するところがそもそもの原因になっているというわけです。

日本人の「個人主義度」を調査する

さて、こうして考えていくと、日本社会が集団主義的な社会であるからといって、それがそのまま日本人それぞれの心にも集団主義的な性格があるとはかぎらないことがお分かりいただけるでしょう。

私たち日本人も、そして欧米人も、日本人は集団主義的な心を持った人々だと思っていて、それが「日本人らしさ」だと思っています。

しかし、それは私たちが集団主義的に振る舞っているだけのことであって、それぞれの日本人の心は、実は少しも集団主義が好きではない、自分の利益や権利を主張する個人主義であるのかもしれないのです。しかし、そのことは「帰属の基本的エラー」ゆえに日本人自身も気づいてい

ないし、ましてや外国人にはなかなか分かりません。

かくして、日本人は集団主義的な心の持ち主であるという「神話」が広がったのではないかと私は実はそう考えているのです。

しかし、意識調査の結果から「本当のところは日本人は個人主義ではないだろうか」といっても、これは単なる仮説にすぎません。そこで実際に、日本人はどのくらい個人主義的な心を持っているのか、それをまず調べる必要があります。

一般的に日本人は、みんなと一緒に行動するのが好きで、自分のことよりも周囲の人たちの利益を大切にする傾向があると思われていますが、はたしてそれが事実なのか——それを確かめるために、私は日本とアメリカで次のような実験を行なってみました。

この実験は三人一組で行なわれるものなのですが、参加者たちは一人ずつ、個別の実験ブースの中に入って、コンピュータを使った簡単な作業を行ないます。この作業の「手間賃」が彼らのアルバイト料になるという仕組みになっています。この実験に参加したのは、日米の大学生たちです。

その作業というのは簡単なテストのようなもので、クリアした問題の数に応じた得点がそれぞれに与えられます。そして、作業終了後に三人の獲得した得点を合計し、その合計得点に見合った報酬がグループ全体に与えられます。実験の参加者たちには、その報酬を三等分したものが支払われます。

つまり、この作業はそれぞれが個別に行なってはいるのですが、報酬の面では共同作業の形を取っているということになります。

このような作業では、「ただ乗り」をする人が出てくる可能性がつねにつきまといまいます。たとえばまったく働かなかつたとしても、他の人が働いてくれれば、その人は労力ゼロで報酬を受け取ることができからです。

そこまで悪質でなくても、個々人の間で作業効率の違いは違ってくるはずなのに報酬額はつねに三分なのですから、一番真面目に働いて結果を出した人は「働き損」ということになってしまいます。

「自分は真面目にやっけていて、実績も出している」という自覚のある人にとっては、こうした共同作業のあり方に不満を感じる場合もあるでしょう。しかし、その人が集団主義的な心の持ち主であれば、「みんなのためだから」と我慢をするだろうと予測できます。

さて、日本人はこうした環境に置かれたときに、どのような態度を取るのでしょうか、そしてそれはアメリカ人とどう違うのでしょうか——これが、この実験のテーマです。

この実験では一セットの作業を二〇回繰り返し、一回の作業ごとに報酬を確定させていくという形式を取りますが、そこで作業の前に「グループを離れて一人で仕事をする」というオプションを選択できるように設定しました。

もし、「みんなと一緒に頑張る」という集団主義的なやり方が気に入らない人は、グループか

ら離脱して、一匹狼になってもいいというわけです。

とはいっても、実社会でも組織の一員として働く道を選ばず、フリーランスとして働けば、余計なことまで神経を遣わなくて済む代わりに、リスクや苦勞を引き受けなければいけないことも多々あります。

そこでこの実験では二つの条件を用意することにしました。

一つは、たとえ一匹狼の道を選択したとしても、集団で働いているときと同じ基準で報酬を得られるという低コスト条件、もう一つは同じ作業量に対して、集団作業のときの半分しかもらえないという高コスト条件です。

本当は「一匹狼」の日本人

さて、こうした条件の下、行なわれた実験で日本人はどのように行動したのでしょうか。

まず、一匹狼になっても、集団作業と同じ基準の報酬がもらえる「低コスト条件」のときの結果から紹介していきましょう。

この場合、日本人もアメリカ人も同じような行動を取りました。二〇回の作業のうち、平均八回の作業で実験の参加者たちは日本人でもアメリカ人でも一匹狼の道を選択しています。

一人あたり「二〇回に八回」という数値を、グループ全体に置き換えると三倍の二四回。つまり、二〇回の作業で毎回、少なくとも一人がかならず一匹狼になっている計算になるわけで、「自

分は他の人よりも効率がいい」と思った人が躊躇なくグループを離れたのだろうと推測できません。低コスト条件では、集団作業を離れるリスクはゼロなのですから、これは合理的な行動だとも言えます。

では、次に高コスト条件ではどうなったでしょうか。

すでに述べたように、高コスト条件では作業グループから離脱することによって、他人の「ただ乗り」は防ぐことができますが、その代わり報酬の基準は半分になります。この条件下で、一匹狼になることでトクをするには、その人がグループ平均の倍以上の成績を上げている必要があります。人の倍以上働くというのは、相当ハードルの高いことで、実際、私の実験でもグループ平均の倍以上の成績を上げた参加者は一人もいませんでした。

つまり、自分の得られる報酬額を考えれば、高コスト条件でグループから離脱することは合理的な選択とは言えません。それでもグループから離脱する選択をするのは、怠け者と一緒にされるのが我慢できない、他人に利用されるのがイヤでしょうがないからだろうと推察されます。

さて、そこで実験の結果を見てみると、高コスト条件でグループから離れるかどうかの頻度において、日米間に明らかな違いが見られました。

アメリカ人参加者の場合、グループを離脱した回数は二〇回のうち平均一回程度しかありません。これに対して、日本人の場合、ほぼ八回も離脱していて、低コスト条件のときとあまり変わりません。つまり、日本人のほうがアメリカ人よりもずっと個人主義的に行動しているというわ

けなのです。

しかし、それにしても報酬が確実に下がると分かっているとしても、他の人たちとの共同作業を捨てて一匹狼になろうとする日本人の「個人主義者ぶり」には、読者のみなさんもきつと驚かれるのではないのでしょうか。

一般的な文化論では、ビジネスでも学問研究でも個人レベルで力を発揮するのがアメリカ人の特性で、これに対して「日本人は個人プレイは弱い、集団で働くと強い」と言われてきたものです。

ところが、この実験ではたとえデメリットがあろうとも日本人の参加者のほうがグループを離脱しています。この実験結果を見るかぎりでは、アメリカ人よりも日本人のほうがずっと「他人に足を引っ張られるのがイヤでしょうがない」と考える傾向が強いということであり、逆にアメリカ人のほうは、多少、他人に足を引っ張られようとも共同作業を選ぶという傾向があることが分かります。

他人を信頼するアメリカ人、信頼しない日本人

さて、こうして見ていくとやはり日本人一人一人の心の特性は集団主義どころか、むしろアメリカ人よりも個人主義的な色彩が強いのではないかという印象を持ちます。

これまで読者のみなさんの多くもきつと、「日本人は和の民族である」といった話を何の疑い

もなく信じてきたことでしょう。

たとえば、よく言われることに、「アメリカ人は小さな文字でびつしりと書かれた契約書を取り交わさないと安心しないが、日本人はいったん相手を信用すれば、たとえ口約束であろうときちんと約束を守る」という話があります。

日本人は協調の精神を持つているから、相手を信用して裏切らない。これに対して、競争社会の文化の中で暮らし、個人主義の精神が徹底しているアメリカ人は相手を簡単に信用したりしない。そればかりか、隙があれば相手を裏切り、蹴落けおとすこともいとわれないという印象を持たれています。

しかし、今紹介した実験結果では、たとえば自分が損をすることになろうとも、日本人は一匹狼の道を選びたがり、ある程度の損は承知でもアメリカ人は他者と協力していこうとしています。

つまり、私たちの「常識」とは正反対の結果が出ていますが、この「謎」を解くカギを提示してくれるのが、日本の統計数理研究所が行なっている調査です。

この調査は日本人二〇〇〇人とアメリカ人一六〇〇人を対象に質問紙調査を行なったものなのですが、その結果を見ると日本人よりもアメリカ人のほうが他者一般への信頼感が強いことを示しているのです。

この調査ではさまざまな質問がなされているのですが、他者一般への信頼感に関する質問は三つあります。

その一つは「たいていの人は信頼できると思いますか、それとも用心するに越したことはないと思いますか？」という質問なのですが、この答えを日米で比較してみると、アメリカ人の四七%、つまりほぼ半数が「たいていの人は信頼できる」と答えたのに対して、日本人では同じ答えをした人は二六%、つまり四人に一人しかいないという結果になっています。

こうした傾向は他の関連する二つの質問でも変わりません。

第二の質問「他人は、隙があればあなたを利用しようとしていると思いますか、それともそんなことはないと思いますか」に対して、「そんなことはない」と答えている回答者がアメリカ人では六二%もいるのに対して、日本人は五三%で、やはりアメリカ人のほうが他者への信頼感が強いことが分かります。

さらに「たいていの人は他人の役に立とうとしていると思いますか、それとも、自分のことだけに気を配っていると思いますか」という質問に対して、アメリカ人で「他人の役に立とうとしている」と答えた人は四七%いたのに対して、日本人回答者では一九%にすぎないという結果が出て、日米差がますます開いています。

「人を見たら泥棒と思え」

こうして見ていくと、日本人がアメリカ人よりも個人主義的であるのは、日本人がアメリカ人よりも他者一般に対しての信頼感が低いことと関係があるのではないかと思わされます。

先ほどの実験に参加した多くの日本人が、アメリカ人よりも集団主義的な行動を取らなかったのは、「他の人は自分を利用しようとするのではないか」とか「他の人は自分のことしか考えていないのではないか」といった疑心暗鬼ぎしんあんきに駆られることが大きく関係しているのでしょう。

実験に参加している人にとって、他のプレイヤーは赤の他人であり、それが男性なのか、女性なのかも分からないし、直接コミュニケーションできるわけでもありません。そうした状況に置かれたとき、日本人はとりあえず「他の人たちは私を裏切ったり、利用しようとするのではないか」と考えてしまう傾向にあります。つまり、ことわざで言う「人を見たら泥棒と思え」という状態になってしまうので、素性の分からない他人と協力しあうことはなるべく避けたほうがいいと判断するわけです。

これに対して、アメリカ人は他者一般に対して日本人よりもずっと信頼感を持っていると言えます。

相手が誰か分からない状況にあっても、アメリカ人のほうは「たいいていの人は信頼できる」と考える傾向にあり、他の人が自分を利用するのではないかとはい日本人ほどには疑われない。そこで、私が行なった実験のような状況でも、とりあえず協力的行動を取ったほうが自分もトクをするのではないかと考えるし、損をしても一匹狼になろうとは考えない——つまり、「人を見たら泥棒と思え」という日本人に対して、アメリカ人は「渡る世間に鬼はなし」ということわざに近い行動をしていると言えるでしょう。

なぜ、他人に対する評価が一八〇度違うのか

日本人は「人を見たら泥棒と思え」と考え、アメリカ人は「渡る世間に鬼はなし」と考える——この事実はいつたい何を意味するのでしょうか。

そこでまず確認しておきたいのは、日本人が他人を容易に信じない傾向があるからといって、それは日本人の「心の性質」がアメリカ人の心よりも狭量であるとか、あるいは劣っているという事ではないということです。

しかしながら現実を見ると、多数派ペン実験や自己高揚傾向実験に見るように、日本人とアメリカ人では心の働き方が違うように見えます。

だが、それは日本人の心がアメリカ人と違うのではなく、日本人の場合、たとえばほかの人と一緒に行動したり、自己卑下してみせることのほうが、日本の社会でトクをするからに他なりません。つまり、そう行動することが日本社会という環境に適応する戦略であつたというわけです。

さて、こうした観点に立つたとき、日本人とアメリカ人の他者に対する信頼感の違いも、実は日米社会の違いが産み出したものではないかという仮説が浮かびあがってきます。

では、いつたい日本とアメリカの社会の違いのどこが、「人を見たら泥棒と思え」の日本人と、「渡る世間に鬼はない」のアメリカ人を作り出したのでしょうか。それを次章で検討していくことにしましょう。

日本の「安心」はなぜ、消えたのか
山岸俊男・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,600 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7172-8

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)